

第 29 回いたばし国際絵本翻訳大賞 イタリア語部門 講評

今回の課題絵本 *Prima di dormire* は、いまイタリアの子供たちのあいだで絶大な人気を誇り、次々とベストセラーを生み出している *Giorgio Volpe* と *Paolo Proietti* の名コンビによる、心がほっこりと温まるキツネとヤマネのお話でした。イタリアでは第2弾も出ています。これまでの課題テキストと比較すると文章量も少なく、使われているイタリア語もシンプルでした。それを反映してか、応募作品の数はこれまでで最も多い 266 通でした。昨年度のテキストが文法的にもかなり難解なものでしたから、昨年度から続けて参加された場合、ちょっと拍子抜けという方もいらっしゃるかもしれません。ですが油断は禁物。こうなると、1か所の読解の誤りや訳語の選択ミスが大きな差になってしまいますから、正確にイタリア語を理解したうえで、一字一句慎重に言葉を選んでいかなければなりません。「文章量が少ない＝簡単」というわけではなく、じっくりと吟味され、削ぎ落された結果だと思われる原文に負けないくらい、訳文も丁寧に吟味していく必要があります。

文章が短いと、うまく伝わるか不安になったり、なんとなく座りが悪いような気がしたりして、つい言葉を補いたくなってしまいますが、そうすると、語り過ぎないからこそその絵と文章の調和が崩れてしまいます。たとえば2ページ目、主人公のキツネとヤマネが最初に登場する場面ですが、ここでは、*Rosso Bel Pelo* と *Quik* という2匹の名前が紹介されているだけで、それぞれがキツネでありヤマネであることは書かれていません。絵を見れば、たいていの子が *Rosso* はキツネだとわかるでしょう。でも、お尻と尻尾しか見えていない *Quik* は、動物にかなり詳しい子でないと、ヤマネだとはわからないかもしれません。教えてあげたくなる気持ちはよくわかりますが、親切心はぐっところえ、原文を尊重してください。この尻尾のふさふさの動物、なんだろう。リスかなあ、ネズミかなあ、と想像をふくらませながらページを繰ることこそが絵本を読む喜びであり、13 ページで初めて、ヤマネと明かされて、そうか、これは「ヤマネ」という動物なんだと発見するのです。「冬眠」という行動をめぐって、仲良しの2匹の違いが鮮明になるまでは、「友達」という言葉だけで十分なのです。

同様のことが、お話の最後のひと言、*insieme* にも言えますね。「いっしょに」だけだとなんだかちょっと物足りない。そのせいか、「すやすやとなかよくいっしょに」といった、情報量も文章の長さも3倍くらいになっている訳が目立ちました。とりわけ絵本に関しては、訳文も、基本的には原文とおなじスペースに納めなければいけませんから、おなじくらいの長さで訳するのが理想です。

主人公のキツネの名前は、*Rosso Bel Pelo* ですが、ロツソ・ベル・ペーロと音だけをカタカナにしたのでは意味が伝わりませんし、子供にとっては覚えにくいかもしれません。ですので、たとえば、「ふさふさあかげのロツソ」のように、意味も踏まえて訳してあげると親しみが増しますね。なかには「あかげじまんのマツカ」など、*Rosso* の部分も日本語にしてく

ださった方もいました。主人公の名前ですから、意味だけでなく、音の響きや、固有名詞として親しみやすいかなど、いろいろな観点から検討して、ぴったりの名前を見つけてください。

イタリア語の読解における数少ない難関のひとつが、おなじく2ページ目の *fare tana* という表現でした。*tana* は「巣」という意味ですが、かくれんぼうの最中に、クイックがいきなり巣をつくりはじめるというのも妙な話ですよ。少しでも「あれ？ おかしいな」と思ったなら、必ず改めて辞書にあたるようにしてください。小学館の伊和中辞典の *tana* の語義には、「かくれんぼうや鬼ごっこのような遊びで、前もって決めた、安全な逃げ場所」と丁寧に説明されています。つまり、日本語でいうところの「陣地」みたいなもののようなのですが、うまく訳するためにはもう少し踏み込んだ理解が必要です。そんな場合は、ネットで検索してみてください。*fare tana* というのは、「見つけた！」と言って鬼が陣地をタッチすることです。そこまで理解して、ようやく適切な訳が考えられますね。その前の *giulnadio*、*uscendo* は、手段を示す *giulnadio* ですから、「出ていくことによって」です。その前の *solo* は、手段を限定するために置かれていますから、文章全体を直訳すると、「隠れていた場所から出ていくことによってだけ、クイックに陣地をタッチする可能性を与えられる」という意味になります。わかりやすく意識すると、「ロツソが ひょっこり でてくると、ようやく クイックが かくれるばんです」(優秀賞)、「かくれんぼをしても、じぶんから出ていかなければ クイックにだって みつけられないほどでした」(特別賞)といった訳になります。

以下にいくつか、そのほか訳す際に気をつけたい箇所をあげておきます。

・p.1 *il bosco si stava vestendo di nuovi colori*: *stare*+*giulnadio*の半過去形ですから、「～しているところだった」という意味です。森の木々が紅葉していく最中だったということですね。

・p.2 *perché nascondersi gli sarebbe stato più semplice*: *nascondersi* は、動詞「隠れる」の原形で、動名詞として用いられています。そのあとの *gli* は「彼に」つまり、「ロツソにとって」、ということです。*più semplice* は、*più* がありますから、比較。(紅葉する前よりも)より簡単になるから、ということです。*sarebbe stato* と条件法過去は、森が色づいたあとは、「簡単になるだろう」という過去未来のような意味合いで使われています。

・p.2 *tanto che*: その前の *mimetizzarsi perfettamente* の度合いを強調しています。*che* 以下のような状況になるほどに、完璧に周囲の風景に溶け込むことができる、という意味です。

・p.5 Rosso e Quik passavano ore a giocare a nascondino: ora の複数形、ore は、「何時間も」という意味合いです。「ロツソとクイックは、何時間もかくれんぼうをして過ごす」

・p.6 Nonostante la felicità di quei momenti: quei momenti は、複数形になっていますから、楽しく過ごせることが何度も繰り返しあることがわかりますね。「そんなふうにして遊んでいるときは楽しいのですが」といった訳でいいでしょう。

p.8 di lì a poco sarebbe andato in letargo: di lì a poco は成句で、「それからしばらくしたら」、という意味です。sarebbe andato の条件法過去も、やはり過去の時点における未来を表わしていて、「もうすこしたら、ふゆごもりすることになる」といった意味合いです。

・p.11 è vero che: è vero は、che 以下のことを聞いたけど、それって本当？ という意味です。相手の言ったことや、人から聞いたことを確認するときに使われる表現です。

・p.11 domandava Rosso cercando di mostrarsi tutto allegro: tutto は強調です。cercare di mostrarsi は、「自分を～に見せるように努力する」という意味ですから、内心では悲しんでいることが伝わってくる訳文がいいと思います。特別賞の方は、「せいっぱい明るくおどけながら、ロツソはききました」と訳してくださいました。

・p.13 ma lo sai...finisco sempre con l'addormentarmi: この finire は、「(最終的に)ある状態になる」という意味です。自分の意思とは裏腹に、そのような状況になってしまったときに用いられますので、「結局、いつも眠ることになってしまうんだ」ぐらいの訳でいいでしょう。その前にある lo sai は、直訳すると、「君もそれを知っているとおり」となりますが、しっかり訳出しなくても、文末を「～んだよね」といった具合に、自分の話に相手を巻き込むような語調にしてあげれば、それで構いません。

・p.15 Se chiedessi all'inverno di non allontanare il sole: ここから、se で始まる文章が3つ続きます。クイックを眠らせない方法についてあれこれアイデアをめぐらせるシーンで、仮定文の後半の帰結の部分(クイックは起きててくれるかなあ)が省略された形です。このような se を日本語にする場合、文頭に「もし」をおかないほうがむしろしっくりくることもあります。頭のなかに、「se=もし」という図式がある方は、いったんそこから自由になって、訳文を練ってみてください。特別賞の方は、「たいようを とおくにやらないでって、冬に おねがいしてみたら どうかなあ？」と訳してくださいました。「冬に」が時をあらわす副詞句ではなく、擬人化したもので、お願いする相手なのだとよく伝わる訳文にす

るにはどうしたらいいか、というのが悩みどころでしたね。「ふゆさん」「ふゆのかみさま」といった工夫も見受けられました。

・p.16 Se facessi così tanto solletico a Quik da riuscire a tenerlo sveglia?: così tanto と da が呼応していて、「da 以下のことが起こるほどたくさん～をする」という意味になります。「ずっと おきていられるように クイックを いっぱい くすぐったら どうかなあ？」

・p.18 *sempre di più*: 「ますます頻繁に」。あくびの回数がどんどん増えているということです。

・p.21 *Basta che sia breve...*: *sia* の主語は省略されていますが、前のロッソの台詞の *una storia* です。*basta* は、*che* 以下の条件さえ整えばそれでいいということですから、「君のお話が、短くさえあれば、いいよ」という意味になります。

今回の課題は、イタリア語の読解そのものよりも、シンプルでありながら情緒のある日本語で、この絵本の世界観を表現するにはどうしたらいいかという、訳文のセンスが問われるものとなりました。そうした場合、ひとつひとつの単語の持つイメージを見極めながら、言葉を補いすぎず、むしろ余白を大切にすることが求められます。子供というのは、気に入った絵本を毎晩のように「読んで」とせがみ、いつのまにか文章を丸暗記してしまうものです。言葉を吸収する時期の子供たちにとって、絵本の文章はそれほど影響力が大きいといえるでしょう。応募したご自身の訳文を、改めて声に出して読んでみてください。寝る前に子供たちが、「ねえ、これ読んで」と思わずせがみたくなるような文章になっていましたか？ 読み終わって本をぱたんと閉じ、ロッソとクイックのように寄り添って眠っている親子を頭に思い浮かべながら、もう一度、ご自分の訳文を推敲してみてください。

1冊の絵本を通して訳すことによって、イタリア語の知識や日本語の語彙・表現力だけでなく、それこそ、日本とイタリアのかくれんぼのの違いだとか、ヤマネの尻尾の形状だとか、いろいろな発見があったことだろうと思います。翻訳は、辞書と本さえあれば、どこでもそんな発見に満ちた豊かで創造的な時間を過ごすことのできる営みです。これからもぜひ続けてください。

イタリア語部門 審査員 関口英子